ドイツ語の他動詞と自動詞の分類について Passivと関連して

佐藤　厚*・進藤俊一

Über die Einteilung in transitive und intransitive Verben im Deutschen im Zusammenhang mit dem Passiv

Atsushi Sato・Shun ichi Shindo

（昭和59年10月31日受理）

Die vorliegende Arbeit behandelt die Einteilung der Verben in transitive und intransitive Verben mit besonderer Berücksichtigung der Einteilung bei Helbig / Buscha. Der Verfasser betrachtet diese Einteilung der Verben in der Zusammenfassung mit dem Passiv und stellt die Frage nach der Behandlung der Verben wie haben, bekommen, besitzen, die nicht passivfähig sind : Gehören diese Verben zu den transitiven oder intransitiven Verben oder muß man für sie einen neuen Bereich einrichten ?

I. Einleitung
Die Einteilung der Verben im Zusammenhang mit dem Passiv-transitiv oder intransitiv
II. Die Einteilung in transitive und intransitive Verben bei Helbig / Buscha
○ Die Einteilung in transitive und intransitive Verben beruht auf dem Verhältnis des Verbs zum Akkusativobjekt und der Sonderstellung des Akkusativs unter den Objekten.
○ Mittelverben (pseudo-transitive Verben) - die Verben mit dem Akkusativ, der nicht im Passivsatz subjektfähig ist.
III. Zusammenfassung
○ H. Brinkmann-Die haben-Perspektive
○ Im Duden gehören die Verben wie haben, besitzen, bekommen usw. den intransitiven Verben an.

I. はじめに

ドイツ語の動詞の分詞には，種々の観点から，いろいろあるが，中でも特に Passiv といった態に関する分類と言えば，他動詞（Transitiv）か，自動詞（Intransitiv）か，といった分類になるであろう。果たして実際，他動詞，自動詞の分類は，どのようにして，そしてどこまで Passiv にかかわりを持つのか，更に，どんな問題点が生じているか，調べていきたいと思う。まず，非常によく分類されていると思われる，G.Helbig/J.Buscha についてまとめてみることにする(i)。

* 秋田工業高等専門学校　独語　非常勤講師

II. G.Helbig/J.Buscha の分類

目的語との関係にもとづいて，他動詞と自動詞を区別することができる。

他動詞と自動詞の区別は，目的語のなかで特殊な立場を占める対格目的語との関係にもとづく。

他動詞とは，受動変形によって受動文の主格主語になる対格目的語を要求する動詞である。

besuchen, senden, verweisen, erwarten, anregen…

自動詞とは対格目的語を要求しない動詞である。対格以外の格及び前置詞格の目的語を要求する動詞も自動詞である。

denken, sterben, helfen, warten, fallen, reisen, erkranken, wachsen, ruhen…

以上の基本的な分類に説明を加えると，

1．(他動詞の分類規準になる)対格目的語—受動文の主格主語になりうる対格目的語—は準義務的な補足成分でもよい。すなわち必ずしも具体的な表層文に現われる必要はない。このような対格目的語を欠く場合は自動詞的用法と解釈する。したがって他動詞と自動詞の分類規準は具体的な表層文における対格目的語の有無ではなく（この立場は実際上不可能であろう），対格目的語の可能性である。以上の理由により，次文における動詞は他動詞とみなす。

Er prüft den Studenten.
彼は学生を試験する。

Er prüft jetzt.（＝自動詞的用法）
彼は今試験をしている。

Er iβt den Apfel.
彼はリンゴを食べる。

Er iβt jetzt.（＝自動詞的用法）
彼は今食事をしている。

2．対格をもちえても，それが受動文の主格主語にならない動詞は他動詞でない。

Der Koffer enthält zwei Anzüge. このトランクには背広が2着入る。

→ *(ii) Zwei Anzüge werden von dem Koffer enthalten.

主語になりえない「内容」を表わす対格をもつ動詞は，他動詞でもなく自動詞でもなく，中間動詞（Mittelverben）（もしくは疑似他動詞 -pseudotransitive Verben）と呼ぶ。中間動詞は受動変形を受けることは決してない。たとえば次のような動詞が中間動詞である。

behalten, bekommen, erhalten, es gibt, enthalten, umfassen

3．自動詞は，主語以外にいかなる補足成分も必要としない動詞すべて（絶対動詞）（1）および，文が文法的に完全になるために，主語以外に少なくともう1つの補足成分を必要とする動詞(相対動詞)の一部からなる。相対動詞が主語以外に要求する補足成分はどのような種類でもよい。それは，他動詞における対格目的語でも，中間動詞における対格でも，与格・属格目的語(2)でも，前置詞格目的語(3)でも，あるいは補足的副詞類(4)でもよい。

次のすべてが自動詞文である。

(1) Die Blume blüht. 花が咲く。
Die Sonne schien. 太陽が輝いていた。

(2) Er half seinem Freund.
彼は友人を助けた。
Wir gedenken des Befreiungstages.
私達は解放日のことを覚えている。

(3) Wir warten auf unseren Freund.
私達は友人を待つ。
Er hofft auf eine Verbesserung seies Gesundheitszustandes.
彼は健康の回復を望む。

(4) Berlin liegt an der Spree.
ベルリンはシュプレー河畔にある。
Er wohnt in der Hauptstadt.
彼は首都に住んでいる。

4．これらの定義によれば，絶対動詞は必ず自動詞であるが，自動詞はその一部が絶対動詞である。他動詞はすべて相対動詞であるが，相対動詞は一部が他動詞である。相対動詞は他動詞のすべてと自動詞の一部である。

対格目的語を要求する動詞
他動詞・相対的
主語になりえない対格を要求する動詞
中間動詞・相対的
与格・属格目的語を要求する動詞
自動詞・相対的
前置詞格目的語を要求する動詞
自動詞・相対的
補足的副詞類を要求する動詞
自動詞・相対的
(主語以外に)補足成分を要求しない動詞
自動詞・絶対的

5．以上の定義による他動詞と自動詞の区分からは，補足成分（目的語及び副詞類）の種類及び義務性，準義務性について何も知ることができない。これらの点は動詞の結合価(Valenz)という観点からのみ扱うことができる。

他動詞・自動詞の定義及び細かい分類はここまでにして，Passiv とのかかわりについてまとめてみる。

すなわち他動詞と自動詞の区別は2つの統語現象に関連する。完了形の作り方(助動詞として haben をとるか sein をとるか)については，ここでは直接関連がないので省略する。

受動変形の可能性と他動詞・自動詞の区別

(1) 他動詞は人称的動作受動文が可能である。
Er übersetzt das Buch. 彼はその本を翻訳する。
→Das Buch wird von ihm übersetzt.

(2) 中間動詞はいかなる受動文も可能ではない。
Die Flasche enthält einen Liter Öl.
このビンには1リットルのオイルが入る。
→ *(iii) Ein Liter Öl wird von der Flasche enthalten.

（3）自動詞には，非人称的動作受動文が可能なものといかなる受動文も不可能なものとがある。

Er hilft seinem Freund.　彼は友人を助ける。
→Seinem Freund wird geholfen.
Er ähnelt seinem Freuhd.　彼は彼の友人に似ている。
→*(iv)Seinem Freund wird geähnelt.

自動詞においては，非人称的動作受動文が可能であるか否かは主語の意味的性格による。

Ⅲ．まとめ

他動詞を，単に対格目的語とる動詞，とせず，受動文の主語になりうる，対格目的語としているのは H.Brinkmann, Duden の場合も同じである。しかしながら受動文の主語になりえない，対格をとる動詞の分類をめぐって三者三様となる。すなわち，Helbig は既に述べたように，Mittelverben(pseudo-transitive Verben)という枠を作り，Brinkmann は“haben-Perspektive”(v)という考え方を提示し，Duden ではそのような動詞はすべて自動詞に入れている(vi)。Passiv の概念が今一つはっきりせず，なじみが薄い日本人にとっては haben が他動詞ではない，Passiv が作れないと言われてもピンと来ないであろう。これは，この Passiv が作れないという一つの文法的特徴として別個に切り離して処理するしかないように思う。

注

(i) Gerhard Helbig/Joachim Buscha, Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. 7, unveränderte Auflage. Leipzig. 1981 まとめるにあたっては邦訳の在間進訳『現代ドイツ文法』1982，三修社を参考にした。
(ii) 文法的に不可能ということ。
(iii) 同上
(iv) 同上
(v) H.Brinkmann : Die haben-Perspektive im Deutschen. In : Sprache-Schlüssel zur Welt. Festschrift für Leo Weisgerber. Düsseldorf 1959
(vi) 後藤武：動詞の分類— haben を他動詞とするか自動詞とするかをめぐって—，ドイツ語教育研究会会報第4号（東京工業大学外国語視聴覚室），1978